

思想史における非連続と連続

——『発智論』・『大毘婆沙論』所出の異部宗——

佐 野 靖 夫

(立 正 大 学)

はじめに

これまで仏教思想を取り扱うにあたって、術語・概念等の形成・変容過程の描出を意味する《思想史》研究の手法が一般に敷衍されてきた。その有効性に対して、《思想》という極めて個人的、また、ある意味において自己完結的な表象を時系列の軸線上に据え直した《思想史》という作業において、それぞれの事象を比較検討することには細心の注意が必要であることは幾度となくいわれてきたことである。特に、他の思想分野に比べ宗教的価値体系を基底におく仏教思想の場合、その述語・概念等が時代背景や作者の著述意図を超えて、無意識的にも同一もしくは単一のものへと収斂されてしまうという構造をもつものであるということが指摘できよう。例えば、《縁起》・《空》・《仏》・《菩薩》といった術語を一瞥しただけで、その内包する意味内容が時代、地域、所属学派、あるいは個人によって異なるであろうにもかかわらず、ともすれば何の論証もまたずに、他の術語間のそれ以上に同質のものであるという暗黙の同意がなされてしまうのである。そしてその同意の背景には、以下に詳述する《連続性》の概念が潜むことが見い出される。本論稿は思想史研究のより有効な方法論として、従来無批判に想定されてきた思想史における連続性の容認という現状から、

《非連続性》というキーワードを承認することによって、テキストをありのままのテキストとして、遡及的仮説・形式的類比・意味論的相似等に対して宙吊りにしておくことが可能となることを提示する。

具体的にはケーススタディとして、アビダルマ研究の一分野としての異部宗（部派の相異）の問題を『発智論』・『大毘婆沙論』という相関したテキストから、①術語の悉皆（全数）調査、②ひとつの部派の論理ではどのような整合性をもって異なる主張をもつものを異部宗となしたかに着目し、アビダルマの特性である有機的思考態を踏まえた、現象としての異部宗に対して論理的帰結としての異部宗を考察する。そこにおいて、固有名詞の悉皆調査の概要と見蘊見納息遡及の異部宗の資料から、テキストに焼き付けられた語の存在条件を示し、その事象の境界を明らかにすることを目的とする。また、悉皆調査における既存のデータベースとその利用における問題点をも指摘する。今回共同研究テーマが方法論であるため、特に、導出のプロセスに論述の重点を置くものとしたい。

I 思想史における《非連続》と《連続》

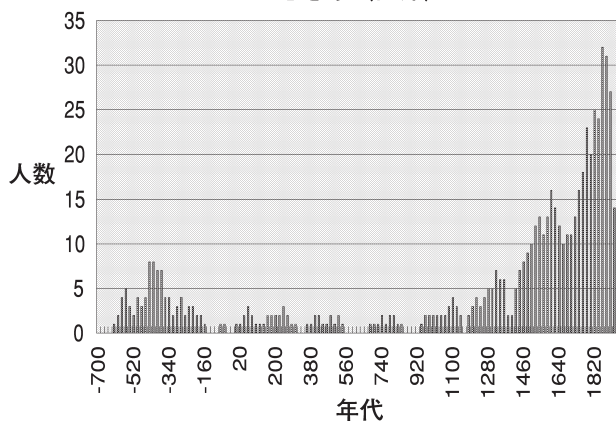
様々な術語、概念、あるいはテキストを取り扱う際に、一般にある思想が“発展”するとか“進化”するという視点を想定した場合、それは一見歴史的整合性を踏まえた問題の設定のように思われるが、実のところ何ものをも保証するものでないことが見てとれる。例えばテキストにおいて、確かに後代の著作は前代の著作を参照して創られるし、そのうえ大部分の経典・律・論書等は、一時に成立したものではないとされる。たとえ、一論師の名が冠されているものであっても、正確に全てのテキストがその著者に帰せられるものであるかどうかについては、十分吟味されねばならないことは論を待つまでもないだろう。テキストは時系列の軸線上に成立す

る。だからといって、時系的に後に書かれてある思想が、前に書かれてあるものにたいして、その背景が等質のものであるとか、あるいは歴史としての時代精神のようなものの混入であるとか、といった判断とは遠く隔絶されたものである、という溝を埋める手だてをひとつも提供するものではないことは明白である。

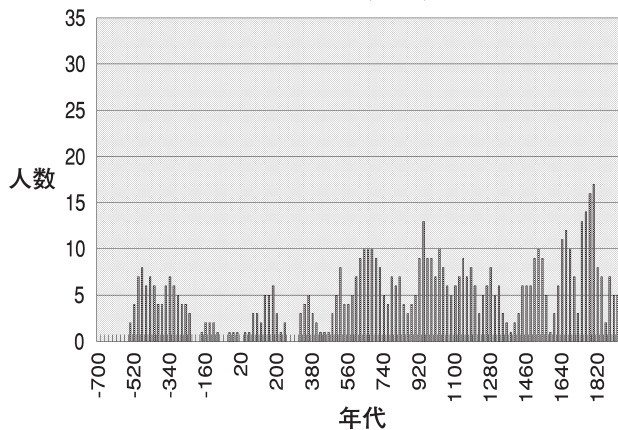
はじめにひとつの試みとして〔Graph I〕〔Graph II〕に載せたのは、「思想家の生存年代重複グラフ」と名づけたもので、Aという思想家が生きていた時期とBという思想家が同じく生きていた時期、その重なった時期の回数を年ごとにカウントしたものである。対象として、明らかに画家・文学者・音楽家といった人たちを除いた哲学者・宗教家等を幅広く数え、没年しかわからない者は一様に単純に－20年したところから起算した。⁽¹⁾ 生没年が比較的記録されている文化圏として西洋〔Graph I〕と中国〔Graph II〕の2つの文化圏を選び、それぞれ西洋190人、中国205人からデータを抽出し、20年おきにB.C. 700年からA.D. 1945年以前に没した人々までをプロットしたのがこのグラフである。横軸に年代、縦軸にその年に生存していた思想家の人数を表わしている。

これらのグラフは非常に大局的な視点からのものであるが、とても興味深い幾つかの特徴を認めることができる。〔Graph I〕の右側の出現率が高いのは、近代以降の記録及び思想の成果が西洋文化圏に偏っていることを表わしている。そして特に注目すべきは、〔Graph I〕〔Graph II〕共に規則的な山がはっきり認められるということ。これらからは著名な思想家達が一様に歴史に登場しているのではなく、ある時期に、ぼつぼつと非連続に固まって出現している事実が見て取れる。くわえて何より特徴的なことは、これらの山の間隔、つまり幅が非常に似通っているところにあるだろう。西洋も中国もほとんど同様な山と幅をもつものとなっている。こ

〔Graph I〕 思想家の生存年代重複グラフ 西洋：190人
思想家（西洋）



〔Graph II〕 思想家の生存年代重複グラフ 中国：205人
思想家（中国）



の幅はおよそ100～170，180年ぐらいの間隔を示している。この期間は人の世代に置き換えると，4～5世代くらい。多く見積もって6世代。7世代までにはならないのではないかという期間であると推定できる。現実

4 世代同居が可能であることから、この期間というのは、真ん中にある人物を挿んだとすれば、その前後、当人同士は直接知ることはなくとも、その真ん中の人物はお互いに直接相手を見知っているであろうという、非常に短い期間であるといえるのである。これらのことを踏まえて、今一度《思想史》という問題を問い直してみると、例えば古典ギリシャ、諸子百家の時代、あるいはルネッサンス等々の百花繚乱の思想家の時代が、実は非常に期間もしくは世代の短い、ひとつの固まった時代であったものであることが確認される。これらの思想家たちはグラフの示す通り、およそ同時代を生きているのである。

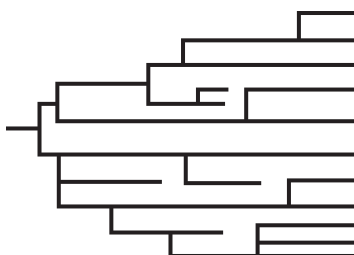
仏教学のフィールドに着目すると、これら《思想史》の取り扱い方から、例えば“原始仏教からアビダルマ仏教へ”、“初期アビダルマ思想から後期アビダルマ思想へ”、“小乗仏教から大乘仏教へ”等々という既存の表現は、およそ注意が必要である。これらの文脈は同様に、一見歴史的整合性を踏まえた問題設定のように思われるが、やはり実のところ何ものを保証するものでないことが理解できる。つまりここにも、ある思想が“発展”するとか“進化”するという無意識的にも底流に潜まされたいくつかの意味概念が内包されている。まず、そこには一つの方向性をもち、一様な座標をもった時間軸が想定される。そして連続性の適用、同一性、過去の原点の設定、未来の統一への希求、等々が暗黙のうちに、無批判に含意されるのである。そこではまた、思想史における非連続性、特殊性、インフレーション的時間系、未来の統一への青写真の放棄、等々をも同時に考慮に入れなければならない問題として提起されねばならないことが忘れ去られている。本来テキストの存在は、最低限そのテキストに記述されたということの確認にすぎないものである。

“ブッダ⁽²⁾の思想”といった表現も多義である。宗教という視点からすれ

ば、一切智者である佛の言説は一言一句もらさず信解し、その深い意味を汲み取らなければならない。実際に仏弟子たちはブッダの時世以来そうしてきたし、⁽⁴⁾ 現在でもそれは変わることはない。世俗においての解釈の違いこそあるものの、勝義としての佛の真理は普遍のものである。それはブッダの成道とともにこの世界に示され、ひとつとして欠けるものなく完成しており、その思想として付け加えるものも、隠されたものもないとされる。⁽⁵⁾ そこででは“信”の体系の文脈での解釈がおこなわれ、本来静的な思索となる。ところが、それを思想史として位置づけた場合の、佛の側でなく私たちの側での“知”の体系としての文脈による解釈は、動的な要素としての前述の発展・進化のドグマに正面から対峙するものと考えられる。

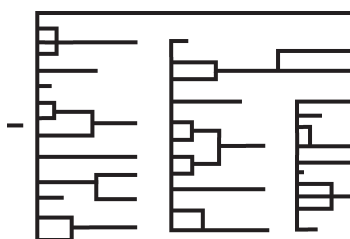
特にアビダルマ研究において、これまでの多くの諸先学の研究は、およそアプローチとして連続性を受け入れたことから、テキストから作者の言わんとする意図を汲み取ろうと、テキストの行間に秘められた思考を模索し、その背後にある体系を再構築しようと試みたものであった。それは例えば、アビダルマ思想における諸部派説のように、現存する限られた資料をあまねく渉猟し、その中から諸部派名を冠する記述あるいは関連項目を摘出し、比較考察することによって各部派の立脚する思想を再構成することを目的とした。しかしながら、現存資料の絶対量の不足、またインド文化特有の歴史年代の記述の欠如等々の問題からも、結果はいまだ十分だとはいいきれものではないことが確かに指摘できるだろう。⁽⁶⁾ そしてなにより、それらは無意識的にも想定された連続性の容認から、ともすれば成立時代、成立地域、著者、著者の属した立場などの異なるテキスト間に現れた同一名の固有名詞をそのまま同義のものと判断し、分析するといった危険を犯しているのである。——いうまでもなく例えば、いったい『集異門足論』の説一切有部と、『発智論』の説一切有部。また、『大毘婆沙論』、

〔fig. 1〕 連続性モデル



→ Time

〔fig. 2〕 非連続性モデル



→ Time

Kv., 『雑心論』, 『俱舎論』, AKVy., TA., ADV., 『異部宗輪論』の說一切有部などが同義, もしくは同一線上の歴史的に発展したものだと本当にいえるのであろうか。あるいは比較に付するための根拠, あるいはその保証をいったい何処に求めているのであろうか。いわんや情報量の極めて少ない他の部派においてをやである。

〔fig. 1〕に, 従来の連続性の概念のモデルを図示したものを載せる。この連続性のモデルでは, 一つの起点から時間の経過に従って, そのものを原点として系統図の様に枝葉が分かれていき, 多様なものへと展開していくさまを表現している。例えば, この起点が歴史上のブッダとしたなら, そこから始まる仏教というものが時間とともに分派し, 見解を異にしたことから, 多数の部派や宗派に分裂していく様子を表わしたものである。ここで特徴的なことは, このモデルにおいて時間は一様に同じタイミングで時を刻んでいるということである。さらに, それぞれ連続しているということから時間を遡れば必ずその起点, この場合には, 例えばどこか途中の時点からでも, ある種の操作を行なえば根源のブッダの思想へと遡れることを暗黙のうちにも了解していることを意味している。

これに対して, 〔fig. 2〕に非連続性の概念のモデルを提示する。この非

連続性モデルは、連続性モデルと同様に起点は確かに一つなのであるが、次の瞬間に、まず可能な限りのヴァリエーションが同時期に一齐に出現することを示すものである。以後、連続性モデルのように枝分かれする場合もあるが、全体としてはある有力なものへと収束化、あるいは洗練化されていく過程を想定している。これはニュアンスとして経済学にいう収穫逡増の原理モデルに非常に近いもので、ある一定のラインを超えた企業は加速度的に肥大化する、金持ちはより金持ちに成り、しがたない貧乏人はいつまでもそのままであるという原理モデルである。また、この収束・洗練化は、必ずしも論理的に正しいものへと収束するとは限らない。もちろん収束のためへの何かしらの選択が行なわれるわけであるが、その基準は論理性では決してなく、情報の受け手の存在において、流行という受容者側の態度に起因すると考えられる。

〔fig. 2〕という二次元の図表では表現し切れないものであるが、この非連続性モデルの時間軸は連続性モデルとは異なり、一様のものではなく、インフレーション的時間軸を想定している。現実の歴史において、ある重要な事件・変革がとてつもなく短期間になされることがある。例えば、20世紀末に起ったソビエト連邦の崩壊、東西ドイツの統一、南北朝鮮問題などの政治的事件は、いまから思えばほんの少し前までほとんど予測がつかなかったものばかりである。これらの歴史事象としてのインフレーション的時間系を思想史においても想定することが、思想史のダイナミズムにより適合するであろうことが指摘できる。

最後に、この非連続性モデルは、始点に遡ることが不可能であるということを示したい。1回目のヴァリエーションの場合、起点が一つであるから遡及可能なようにも思われるかもしれないが、2回目のヴァリエーション以降はもはや不可能である。2回目のヴァリエーションの一本の軸が1

回目のヴァリエーションのどの軸の後継者であるか、複数であるか、ひとつであるのか、特定する保証がまるでできないのである。現実にはこのヴァリエーションの数ももっと多く、かつ、非連続の階層ももっと様々な形で絡み合っているものと予測される。いま流行の言葉でいうなら、これらは複雑系のモデルとして提示できるかと思われる。

整理すると、非連続性モデルの特徴は、

- ◎非連続性であること
- ◎過去の原点の設定と未来の統一の放棄
- ◎インフレーション的時間系の導入
- ◎遡及的仮説・形式的類比・意味論的相似等の棚上げ
- ◎情報の受容者の存在の確認
- ◎テキストの特殊性の承認

などをあげることができる。

思想史において、この非連続性モデルをとる有効性は情報の受容者の存在の確認にある。思想という極めて個人的な作業は、口伝であれ書写であれ、テキストとして他者に示された場合、極論としてその受け手の数だけヴァリエーションが生じる。そして、そのテキストがどのように解釈されるかは、受容者サイドの事柄として記録されていくのである。連続性モデルの場合は、どちらかといえば思想そのもの——それ自体テキストの特殊性という壁が存在するにもかかわらず——、いいかえれば受容者不在のままに、無造作に、各々を比較考察してしまう危険がある。こうした作業は思想史という概念とは本質的には異質のものであるはずである。

これらを仏教学、特に、部派分派のモデルとして考えると、まずブッダがいて、同様に次の時点では受容者側の問題として、おそらく可能な限り多数のタイプのヴァリエーションが生まれる。誤解を恐れずにいうなら、

現在最初期の仏教とされているタイプの思想だけでなく、一般に後の大乘仏教や密教といわれるもののもとなるようなもののあらゆる要素までもが、あるいは、はたして仏教と名づけてよいのか判らないようなものの要素までが、ブッダの在世中という一時期に、ブッダの教えの名のもとに同時に存在した可能性を否定できない。換言すれば、そのヴァリエーションの存在を承認することの方がより自然な解釈のように思われる。それらのうち、時代のニーズに適合しなかったものは、次の世代へと受け継がれることなく消え去り、またあるものは強力に支持者を獲得していく。生き残った思想は、より洗練され緻密さを加えていく。そしてある時期が来ると、生き残ったもののどれか、あるいは複数、もしくは他の原因からの影響で再び爆発的に多数のタイプのヴァリエーションが生まれる。それらは限りなく非連続的であり、特殊であり、これらの複合的システムが部派分派の構造である。

II 『発智論』・『大毘婆沙論』所出の異部宗

今後、恐らく飛躍的に活用されるであろうコンピュータを利用した仏教学研究の分野では、特に、前述の非連続性モデル適用の必要性が重要である。なぜなら、大量のデータ解析から得られた結果は、ともすればテキストの特殊性を覆い隠してしまう可能性があるからである。しかしながら、十分注意された、また、きちんと確立された手法に基づくデジタルデータの活用は、これまで個々人の手作業ではとても見ることのできなかった領域に到達可能となる。

〔Table A〕に載せたのは、これまで公開されているテキスト・データベースから検索したものの結果である⁽⁷⁾。この数値は単純にその単語の出現回数を示している。また〔Data A〕には、これまで研究されてきた、部

[Table A]

『阿毘達磨發智論』		『阿毘達磨大毘婆沙論』	
大衆部	0	大衆部	11
犢子部	0	犢子部	17
法密部	0	法密部	7
化地部	0	化地部	3
飲光部	0	飲光部	3
經部	0	經部	4
譬喩者	0	譬喩者	89
分別論者	0	分別論者	125
(分別論師)	0	(分別論師)	3
(分別論宗)	0	(分別論宗)	4

[Data A]

『大毘婆沙論』全体…譬喩者86回，分別論者約50回，犢子部は13回，
大衆部は7回，法密部は4回，飲光部は3回，
化地部は2回，經部は2回

派の教理として何回出現したものであるかを参考として引用する。⁽⁸⁾このよ
うな，大正新脩大藏經にして1000ページ以上もの，膨大なテキストの全て
の単語にわたる悉皆（全数）調査のデータは，そのテキストの境界を示す
指針となるものである。⁽⁹⁾

ところで，このようにして得られたデータをもとに，そのまま部派の思
想を論じることの妥当性の尺度が本論稿の関心事である。テキスト・デー
タベースが広範囲に入手可能となった現在では，そのテキスト・データベ
ースの信頼性の評価及び検索手法のレベルの提示を前提として，今後，用
語・用例の悉皆調査結果を論文に掲載することが必須条件となることが予
想される。⁽¹⁰⁾少なくとも，そのテキストで使用された術語・概念を全てピッ
クアップすることには，それだけで重要な意味があることはいうまでもな
い。しかしながら，それらをそのまま比較考察することには，まさに連続
性のトラップへと身を投じてしまう危険をはらむのである。これらのこと

を踏まえて、ここではそのテキスト独自の、そのテキストに具わる論理的構造としての術語・概念の使用法を浮き上がらせるための手法として、厳密なかたちでテキストの記述から遡れる概念とその枠組をトレースする論理遡及解析 (logical retroactive analysis) の手法を試みる。そしてテキストに書かれていることを書かれているがままに受止め、その記述された背景に隠された意味を問うのではなく、何故その記述が現われ、何故他のいかなるものもその場所を占め得ないのかを問題とする。そのテキストにおける概念の限界と、そこに記述されねばならなかった語の存在条件を示すことを目的とするものである。

ケーススタディとしてテキストを厳密に区切り、『大毘婆沙論』巻198～200の見蘊第八中、見納息第五に説かれる「諸外道の諸見趣と其の對治道の論究」⁽¹²⁾において、『大毘婆沙論』の作者が外道説を破するためとした論拠を摘出し、『大毘婆沙論』における異部宗、あるいは異部宗とせざるを得なかった根拠を探る。そして、それはそのまま『大毘婆沙論』という出来事における異部宗と外道の境界、換言すれば、『大毘婆沙論』なるテキストが自ら正統を任ずる仏教の限界を浮き彫りにしようとするものである。なお、この研究自体は以前他の学会で報告したので詳細は譲るとして、今回その手法をトレースすることに主眼をおくことにするものである。⁽¹⁴⁾

『大毘婆沙論』見蘊見納息は、大きく以下の三つのパートに分類される。⁽¹⁵⁾

- I. 諸外道の見解学説 T. vol. 27. pp. 987c-996b
- II. 諸見趣の五種分類及び六十二見論 T. vol. 27. pp. 996b-1002b
- III. 諸見趣の断常二見分別及び見納息総括 T. vol. 27. pp. 1002b-1004a
- I. 諸外道の見解学説では、ブッダ在世中の六師外道・婆羅門教哲学の所説をはじめとして、これまで説かれてきた諸種の異見異説を個別に35例あげ、その自性・對治・等起を述べる。

〔Table B〕

謗	因	邪	見	【 1 】【 3 】【 4 】【8-c】【 9 】【11】【13】【14】 【19】【21】
謗	果	邪	見	【 2 】【 3 】
謗	道	邪	見	【 5 】【 7 】【8-d】【8-e】【8-f】【10】【12】【13】
謗	滅	邪	見	【 6 】
邊	執	見	斷	【8-a】【24】
邊	執	見	常	【8-b】【15】【22】【23】
非	因	を	因と計する戒禁取	【16】【17】【18】【20】
有		身	見	【25】【26】【27】
劣	法	を	取りて勝となす見取	【29】【30】

〔Table C〕

見	苦	所	斷	【 2 】【 3 】【8-a】【8-b】【15】【16】【17】【18】【20】 【22】【23】【24】【25】【26】【27】【28】【29】【30】【31】
見	集	所	斷	【 1 】【 3 】【 4 】【8-c】【 9 】【11】【13】【14】【19】【21】
見	滅	所	斷	【 6 】
見	道	所	斷	【 5 】【 7 】【8-d】【8-e】【8-f】【10】【12】【13】

これらを自性・對治において整理すれば、上掲のようになる。

II. 諸見趣の五種分類論および六十二見論では、I. において個別、もしくはある人物・学派の主張とされているものを、総論として論理的に整理・分類しようと試みた外道論が展開される。はじめに、五種分類論【II-1～5】、次に、【 α 】遍常論 4. 【 β 】一分常論 4. 【 γ 】無因生論 2. 【 δ 】有邊等の論 4. 【 ε 】不死矯亂論 4. 【 ζ 】有想論 16. 【 η 】無想論 8. 【 θ 】非有想非無想論 8. 【 ι 】斷滅論 7. 【 κ 】現法涅槃論 5. の六十二見論が述べられる。

III. 諸見趣の断常二見分別及び見納息総括では、I. II. をもって見蘊

における外道説の定義と提示をおこなったのち、その各々に対して“有見”(bhavaditṭhi, bhavadrṣṭi)=常見と“無有見”(vibhavaditṭhi, vibhavadrṣṭi)=断見の二見に分類する。

〔Table D〕

常見	【1】【2】【3】【4】【5】【6】【7】【15】【16】【17】【18】【20】【22】【23】【25】【26】【27】【28】【29】【30】【32】【33】【35】【II-1】【II-2】【II-3】【II-5】【α】【β】【δ】【ε】【ξ】【η】【θ】【κ】
断見	【8-a】【9】【10】【11】【12】【13】【14】【16】【17】【18】【19】【20】【21】【24】【33】【II-4】【II-5】【γ】【ι】

しかし、およそのものは、「有るが説く」として断常二品に入ると述べられる。つづいて命者と身との関係における見の断常分別がおこなわれ、最後に総括として見蘊の総まとめである、色・心等が断見でも常見でもない理由が説かれて『大毘婆沙論』は終わる。

これらの分類を参考にして、個別に異部宗教義との接点の抽出を試みる。はじめに、“謗因・謗果の邪見”(【1】【2】【3】【4】【8-c】【9】【11】【13】【14】【19】【21】)とされる所説においては、等起の有説などとして、主に[a] 因果論, [b] 三時業, [c] 中有の存在についての3つの論点から考察される。そこからは、

〔Table E〕

[a] 因果論において、			
諸外道	3	[a-1a] [a-5d] [a-6a]	
譬喩者	6	[a-1b] [a-2a] [a-4a] [a-5a] [a-6b] [a-6c]	⁽¹⁶⁾
阿毘達磨論師	1	[a-2b]	
相似相續沙門	2	[a-3a] [a-4c]	
外國諸師	1	[a-3b]	
迦濕彌羅國諸論師	1	[a-3c]	
分別論者	1	[a-4b]	

大衆部	1	[a-5b]
飲光部	1	[a-5c]
[b] 三時業において、		
譬喩者	1	[b-1a]
阿毘達磨論師	1	[b-1b]
[c] 中有の存在についてにおいて、		
分別論者	2	[c-1a] [c-3a]
應理論者	1	[c-1b]
譬喩者	2	[c-2a] [c-3a]
阿毘達磨論師	1	[c-2b]

などの諸説が見られる。次に同様に，“謗道・謗滅の邪見”【5】【6】【7】【8-d】【8-e】【8-f】【10】【12】【13】とされる所説においては，等起の有説などとして，主に [a] 擇滅論，[b] 學・無學，及び四沙門果についての 2 つの論点から考察される。これらからは，

[Table F]

[a] 擇滅論において、		
譬喩者	1	[a-1a]
分別論者	1	[a-1b]
[b] 學・無學，及び四沙門果についてにおいて、		
犢子部	1	[b-1a]
分別論者	4	[b-1b] [b-1e] [b-2a] [b-3a]
涅槃轉變論者	1	[b-1c]
涅槃決定論者	1	[b-1d]
譬喩者	2	[b-3b] [b-4a]
大徳	1	[b-4b]

などの諸説。次に同様に，“邊執見常見の攝と邊執見斷見の攝”【8-a】【8-b】【15】【22】【23】【24】【28】【32】，“有身見”【25】【26】【27】，及び“六十二見”【α】【β】【γ】【δ】【ε】【ξ】【η】【θ】【ι】【κ】とされる常見と斷見の所説においては，等起の有説などとして，主に [a] 四相論，特

に刹那と轉變, [b] 無有愛 (vibhavatrṣṇā) についての2つの論点から考察される。

[Table G]

[a] 四相論, 特に刹那と轉變において,

譬喩者	3	[a-1a]	[a-1g]	[a-2a]
分別論者	2	[a-1b]	[a-1g]	
法密部	2	[a-1c]	[a-1g]	
相似相續沙門	2	[a-1d]	[a-1g]	
經部師	2	[a-1e]	[a-1g]	
轉變外道	1	[a-2b]		
疑を生ずるもの	1	[a-1f]		

[b] 無有愛について,

分別論者	2	[b-1a]	[b-1b]
------	---	--------	--------

などの諸説。最後に, “非因を因と計する戒禁取” (【16】【17】【18】【20】), “劣法を取りて勝となす見取” (【29】【30】) とされる所説においては, 等起の有説などとして, 主に [a] 宿作及び自在の変化, [b] 現法涅槃論についての2つの論点から考察されるが, それに直接対応する外道もしくは異部宗の名の冠される諸説は見い出すことができない。

以上, 資料のアウトラインを述べただけのものであるが, これらから指示された

見蘊見納息遡及…譬喩者15回, 分別論者12回, 犢子部1回, 大衆部1回,
法密部2回, 飲光部1回, 化地部0回, 經部⁰⁷2回

というデータは, 『大毘婆沙論』見蘊見納息というテキストに焼き付けられたひとつの対象領域を見て取れるものである。これらの手続きを踏むことによって, 単に名称, もしくは個別の教理の羅列ではなく, 『大毘婆沙論』というテキストの, 限定された, ひとつの論理的帰結としての異部宗の境界, 並びに語の存在条件を提示可能に考えるものである。

む す び

仏教研究の方法論的反省という共同テーマに寄せて、これまでどうしても納得し切れなかったテキストの取り扱い手法に、自分なりの何がしかの方法論を摸索してみた。非連続性モデルは、ひとつのアプローチとして、思想史の構築に極めて有効なキーワードに考える。また、個々のテキストを共通化・平均化のもとにぼやかしてしまう不合理には、誰もが、いま一度真剣に対峙しなければならない課題である。ブッダの教えの捉え方は様々である。弟子として、宗教として捉える。あるいは哲学、思想として捉える。そして、教えの受け手サイドの人々の営みとして思想史として捉える。人文科学の一分野としての仏教は、その意味でもまだ若い分野である。なんとすれば、思想家の生存年代重複グラフのひとつの山にも満たないのであるから。

注

- (1) 出典になるべく公平をきすため複数の専門辞典などを避け、より一般に広く利用されている『世界史年表・地図』（吉川弘文館、2000）のみから作成した。
- (2) ここでは便宜的に、歴史上の個人である Gautama Siddhārtha に“ブッダ”の語を、思想・宗教上の概念として“佛”の語を使い分ける。
- (3) e. g. 以一切種所知法性甚深微妙。非佛世尊一切智者。誰能究竟等覺開示。〔『大毘婆沙論』卷1 序 T. vol. 27, p. 1a〕
- (4) e. g. 答世尊在世於處處方邑。爲諸有情以種種論道。分別演說阿毘達磨。佛涅槃後或在世時。諸聖弟子以妙願智。隨順纂集別爲部類。〔『大毘婆沙論』卷1 序 T. vol. 27, p. 1b〕
- (5) cf. DN. II. Mahā-Parinibbāna-suttanta. XVI. 2. 25. p. 100.
- (6) インド一般に受け入れられた輪廻思想において、生き物は死後49日目には何がしかの世界に生まれ変わると信じられている。この思考形態からは、例えば一人においては進化・発展のダイナミズムを考えることが可能であるが、総体としてはあくまで静的な変化の無い世界観となる。アビダルマ特有の時間論については、See. 拙論「三世実有と現在有体過未無体一時空座標解釈

からの一つの試み」(『仏教学』41, 1999)

- (7) 『発智論』はSAT(大蔵経テキストデータベース研究会, 代表委員下田正弘), 2000-06, 『大毘婆沙論』は瑜伽行思想研究会(開設責任者早島理), 1998-9公開のデータベースを利用。『大毘婆沙論』は検索語が2行にまたがった場合に検索不能となるため独自の検索プログラムを開発, 使用。
- (8) cf. 加藤純章(1989) pp. 70-72. 川村昭光(1978) pp. 168-169. 金倉圓照(1955) pp. 55-69.
- (9) ここで最も重要なことは, テキスト・データベース自体の信頼性の問題である。今回利用したSAT, 瑜伽行思想研究会作成のデータベースにおいても誤入力の問題がある。現行のコンピュータの場合, 入力ミスがあると検索にかからない可能性が非常に高い。また大正新脩大蔵経自体の誤植, 区切りの問題, ひいてはテキストクリティックの問題もある。従来 of 書籍等での目視による確認では, 研究者自身に確認の機会があるが, コンピュータ検索はその可能性すらない。データベースそのものがまだ作成途中のものであるためいたしかたのないことであろうが, その信頼性を評価する基準を設けるシステムの必要性が何より望まれるものである。また, 異体字を含む複雑な漢字フォントの問題, 台湾・韓国等のデータベースとの国家間における文字コードの相異による文字化け等, 技術的なレベルでの未解決問題が指摘できるだろう。
- (10) 全文一致検索の他に, あいまい検索, もしくは独自の検索技術を使用したか否かで検索のヒット率が異なる可能性がある。特に, サンスクリット語・パーリ語のように語形変化の複雑な言語において顕著である。悉皆調査の場合データベースの信頼性に加えて検索の信頼性の評価の基準づくりが必要である。
- (11) 本来, 辞書の編纂は事例・用例集づくりであるといえる。したがって, あるテキストの術語の悉皆調査結果は, そのテキストにとっての, 索引であるだけでなく完全な辞書づくりに他ならない。
- (12) T. vol. 27, pp. 987c-1004a
- (13) K. 毘曇部 vol. 17. p. 118 の章題を援用。
- (14) See. 拙論「『大毘婆沙論』見蘊見納息迦及の外道と異部」(『宗教研究』71-4-315, 1998)
- (15) cf. 対応箇所として, 『発智論』見蘊第八中見納息第五 T. vol. 26. pp. 1027b-1029b 『八鍵度論』阿毘曇見鍵度見跋渠第五 T. vol. 26. pp. 913a-914c
- (16) 但し, [a-6c] は「譬喩尊者」とある。
- (17) 説としては1回。